

宇宙惑星科学

牧野淳一郎

惑星学専攻

評価等

- 小テスト (初回はなし) (レポートはなし)

講義概要

1. ビッグバン宇宙論: 2コマ分くらい
2. 天体形成 (主に銀河): 2コマ分くらい
3. 星形成・進化、惑星形成: 3コマ分くらい

講義の目的

- 惑星形成を、宇宙における階層的構造形成全体の中で理解する
- 同時に、惑星形成研究を天文学・天体物理学研究の中で位置付ける
- そのために宇宙の始まり、銀河等の天体形成、星形成、惑星形成の順にトップダウンで話を進める

ビッグバン宇宙論

- 宇宙論の歴史
- 現在の描像
- 残っている問題
 - インフレーション
 - ダークマター
 - ダークエネルギー

天体形成

- 大規模構造・重力不安定 (ジーンズ不安定)
- 重力熱力学的不安定
- 円盤構造、軸対称不安定、スパイラルモード
- 銀河形成
- 銀河と太陽

星形成と惑星形成

- 星形成
 - 星形成を考えるいくつかの立場
 - 初代星
- 恒星進化
 - 星の一生
 - 中性子星・ブラックホール・重力波
- 惑星形成の標準ないし京都/林モデル
 - minimum solar nebula model
 - シナリオ紹介
 - 理論的問題
 - わかっていないこと

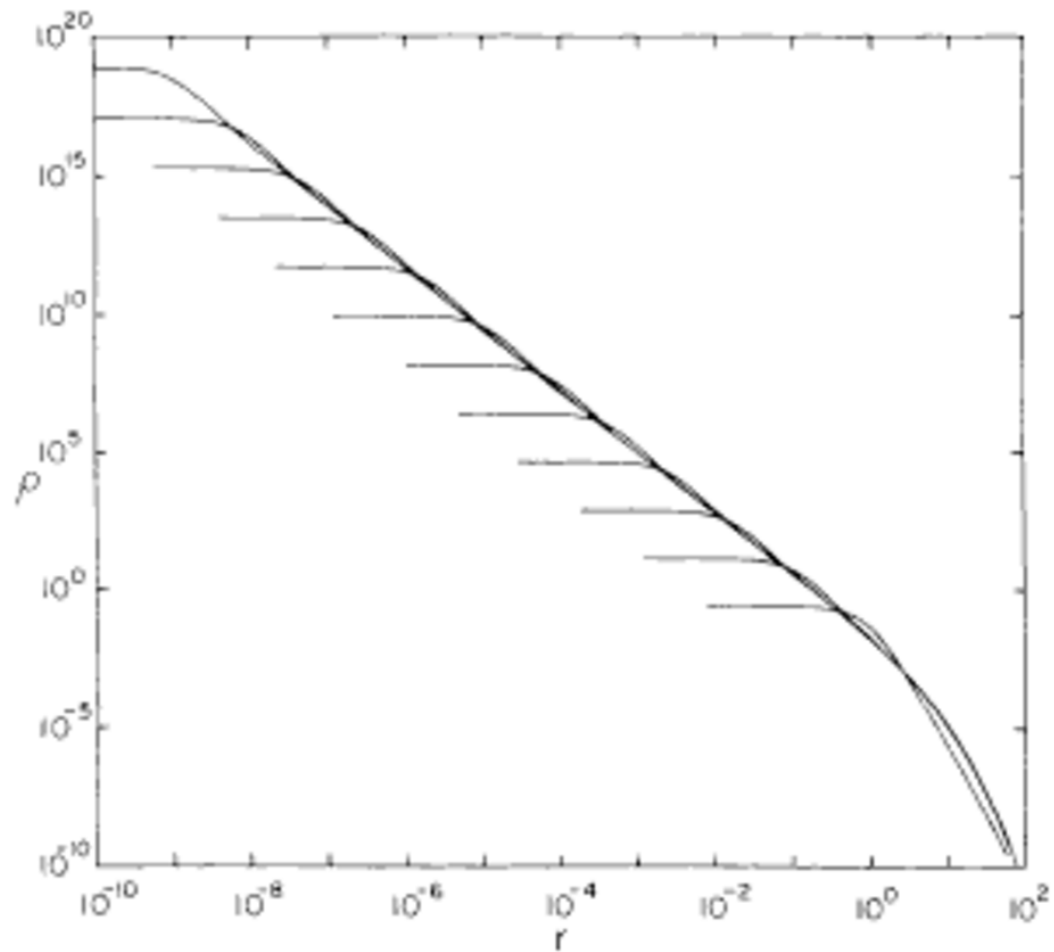
もっと先の進化

摂動が有限振幅まで成長したあとの進化：数値計算で調べる。

Hachisu *et al.* (1978)：自己重力流体について数値計算した。

Cohn (1980)：流体近似を使わない軌道平均フォッカー・プランク方程式の数値積分から、自己相似解が実現していることを示した。

自己相似解



最終状態？

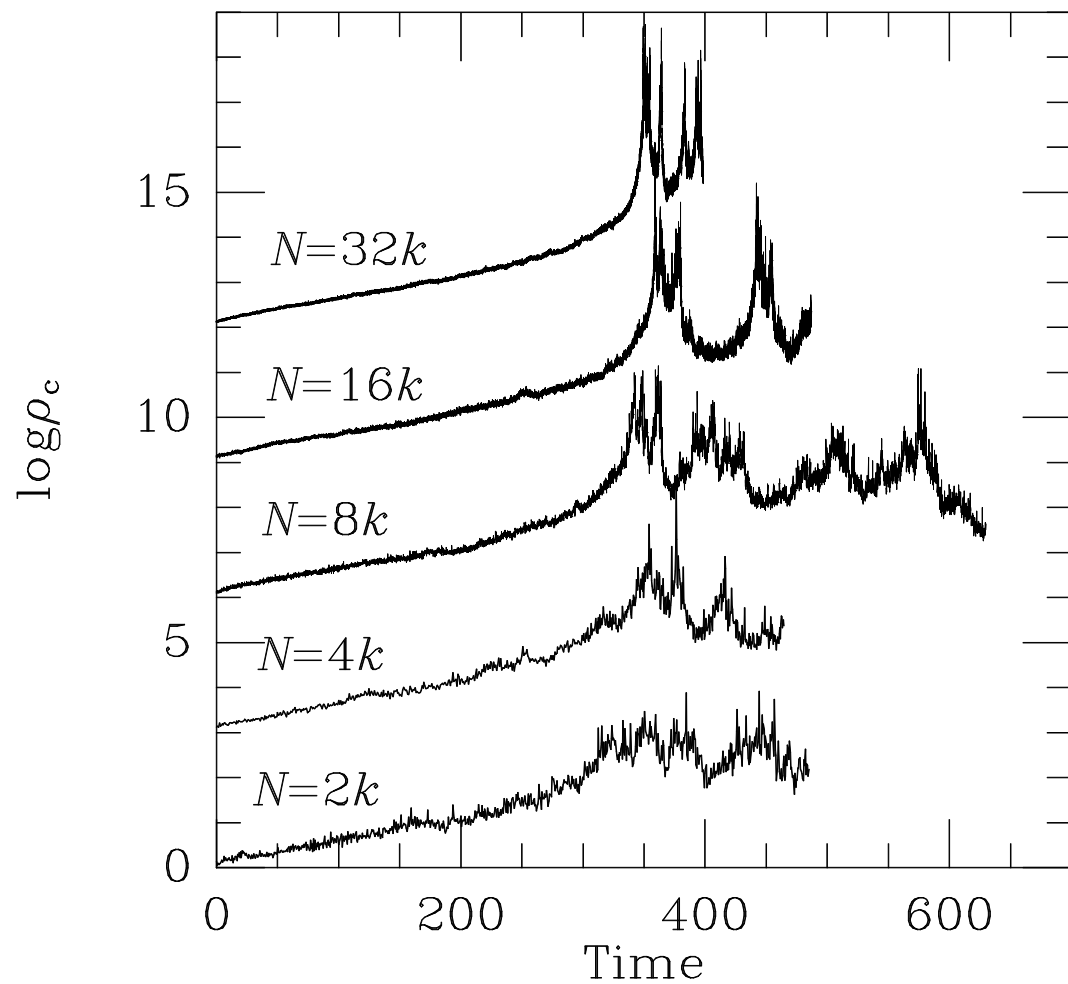
中心部の密度が非常に上がってくると、

- 星同士の近接遭遇
- 3星が同時に近付く

連星ができる。これは「エネルギー放出反応」（核融合と同じ）

これにより、今度は中心部が膨張を始めると理論的には予測されている（重力熱力学的振動）

重力熱力学的振動



球状星団の中心部ではこのようなことが起こっている可能性が高い。

球状星団中心の天文学的意義

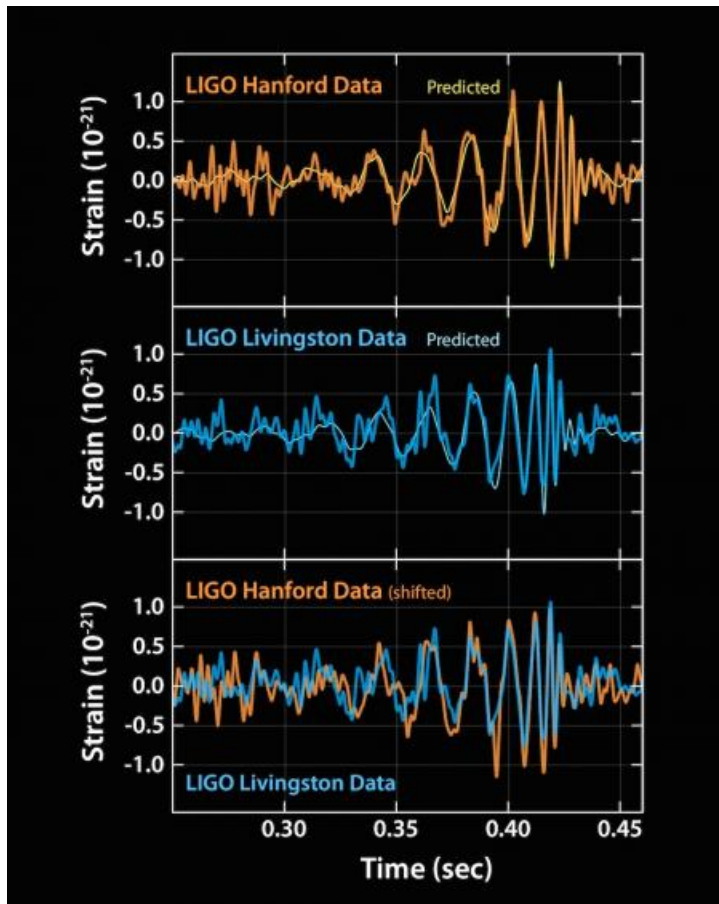
- 多数の連星が形成される。
- 熱力学的進化: 重い星は星団中心に沈む
- ブラックホールや中性子星の連星が多数形成される場所である可能性
- 低質量 X 線連星やミリ秒パルサーは実際に多数見つかったている
- 重力波も検出されたのでこれから注目される？

重力波初観測

(興味がある人は「科学」2016年5月号の牧野の解説記事を)

- 2016年の2月11日 10:30 (東海岸時間) LIGO グループ発表
“We have detected gravitational waves. We did it!”
- どこにあるどういう天体だったか
 - 13億光年先
 - 太陽質量の36倍のブラックホールと29倍のブラックホールが合体、62倍のブラックホールになった(3太陽質量が重力波のエネルギーになった)

検出された波形



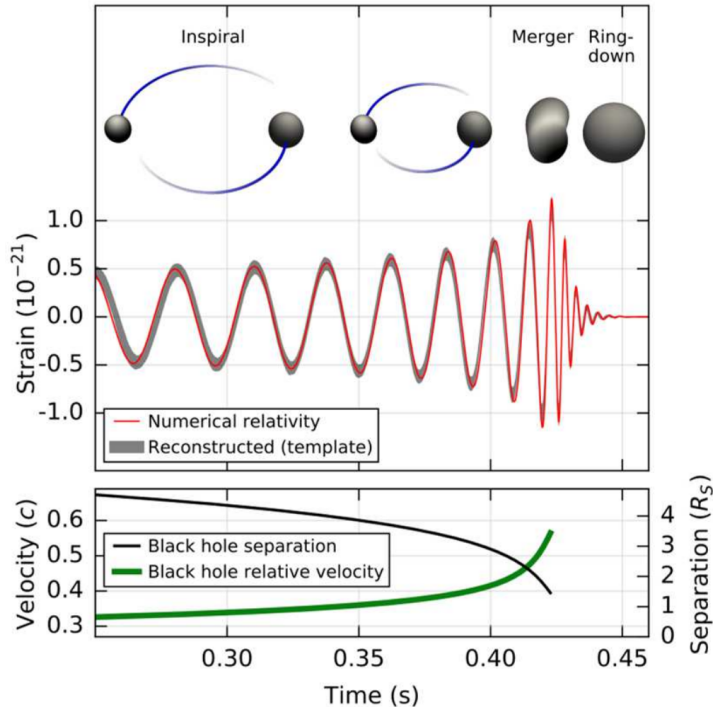
横軸: 時間

縦軸: 歪み (「空間の歪み」)

最大振幅: 10^{-21}

3000km 離れた2つの測定器
(基線 4km のマイケルソン・
モーレー干渉計) で同じ波形
観測

LIGO が捉えたもの



Inspiral: 合体直前、重力波放出によって軌道が近付き、周期が短く、振幅が大きくなる

合体の瞬間: 大振幅、高周波数の波

リングダウン: 1個のブラックホールになってからの時空の振動

シミュレーションで予測されていたものと非常に良く一致:
逆に合計の質量・質量比、距離を決められる

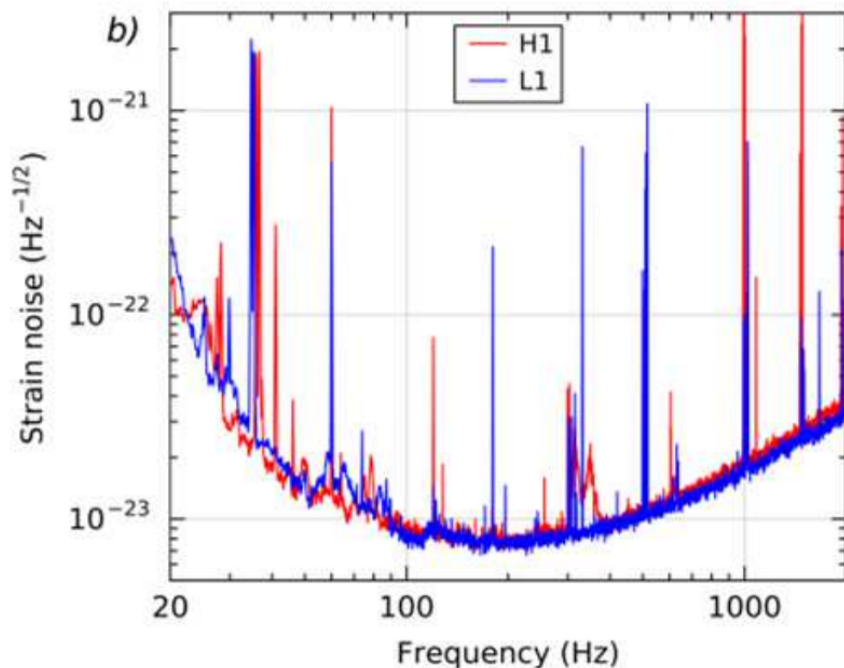
重力波検出の意義と今後の研究の方向

- 本当に重力波が世界で初めて検出された
 - 一般相対性理論が本当にそこまで正しいことの完全な証明 (線型の範囲で正しい代替理論はすべて否定されたといっている)
 - より精密な重力理論、ブラックホールの性質の研究への道 (スピン、電荷の影響他)
- 36 太陽質量と 29 太陽質量のブラックホール同士の合体だった
 - 全く予想外
 - 見つかると思っていた/見つけようとしていたもの:
連星中性子星の合体

何故予想外だったか？

- 中性子星は多数見つかっている。超新星爆発の後に普通にできる (かに星雲パルサー: 1054年の超新星爆発でできた)。球状星団1つだけでその中に数十から数百個ある。
- 中性子星連星もいくつかは見つかっている。(連星パルサー)
- ブラックホールは10太陽質量を確実に超えるものは見つかっていなかった。ブラックホール連星はもちろん見つかっていない。
- なお、100万太陽質量を超える大きなブラックホールは多数見つかっている。これらは銀河中心にある。我々の太陽系の中心:400万太陽質量のブラックホール。

とはいえ理論的には、、、



LIGO の感度: 100Hz あたり
で最も高い
今回のイベントはちょうどそ
の辺
イベントの重力波強度: 距離
が同じなら質量に比例。

宇宙の体積あたりのイベントレートが同じなら、(感度が落ちない範囲で) 重いものは質量の3乗に比例して検出レート上がる。ブラックホール合体が多いわけではない。中性子星合体の1/1000より多い、という程度。

170817 のイベントで、めでたく中性子星 (少なくとも一方は) の合体が観測された。重力波だけでなく、ガンマ線、光、電波等でも。

これから期待されること

- 非常に沢山のイベントが検出される。特に LIGO の感度があがると増える。
- 観測される質量の上限: 100-200 太陽質量。そこから上は LIGO は感度がない。
- 中性子星合体もそこそこの数検出されるはず

つまり: (200 太陽質量以下に限ると) 宇宙のどこでいつどういう質量のブラックホールや中性子星が合体したか、が大体わかる。

言い換えると:

メカニズムも距離も謎なガンマ線バーストや、Kepler 衛星まで数が少なかった系外惑星に比べると、突然膨大な観測情報がやってくる。

恒星円盤、スパイラル構造

ここからは円盤状の系を扱う。銀河円盤、原始惑星系円盤等で同じメカニズムが現れる。

円盤状の系の例

円盤に近い恒星 (とは限らない) 系の代表的な例は以下のものである

- 円盤銀河の円盤
- 原始惑星系円盤
- 惑星の周りのリング

これらは、円盤である、ということについては同じであり、物理プロセスにも共通の部分が多い。

そもそもなぜ円盤になるか？

- 自己重力的なガス雲を考える。
- 基本的は輻射でどんどん冷える＝エネルギーを失う。
- もしも自分が球対称で周りから力も受けてなければ、そのまま1点に集まれるが、実際には自分が球対称ではなく、周りの構造も一様ではないので、トルクをうける。このため、角運動量がゼロにはならない。
- エネルギーは輻射でどんどん抜けて収縮するが、角運動量はなかなかそうはいかないので、最終的には回転による遠心力と重力がつりあう

円盤銀河はこういう説明がもっともらしいが、惑星系とかだとではほとんどの質量は星に行くのは何故か？というのはそれほど自明ではない。

ではみんな同じか？

色々違う。

- 円盤の質量
- 重力ポテンシャルの形
- 円盤の粒子が物理的に衝突するかどうか

質量の違い

- 銀河円盤は重い、つまり、ダークマターハローやバルジの質量と、円盤の質量は同程度。自己重力の効果が大
- 惑星リング: 土星リングでもその質量は土星本体の 10^{-9} 程度
- 原始惑星系円盤では、太陽の質量の 1% 以下

質量の違いは、不安定モードやパターンの大きさに違いをもたらす。

重力ポテンシャルの違い

- 銀河円盤では円盤自身やダークマターハローが作るポテンシャルになって単純なケプラーポテンシャルではない: 軌道が閉じた楕円軌道ではない
- リング、惑星系では基本的には中心星のケプラーポテンシャル、軌道は閉じた楕円軌道

閉じた軌道の場合には平均運動共鳴や永年摂動の役割が閉じない場合よりもはるかに大きくなり、ケプラー軌道であることに固有の様々な現象が起きる。

平均運動共鳴・永年摂動

- 平均運動共鳴

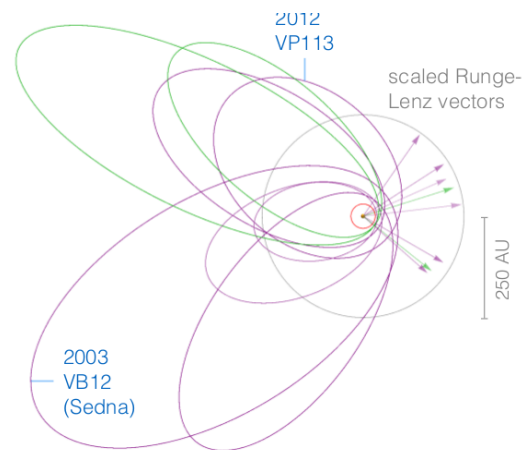
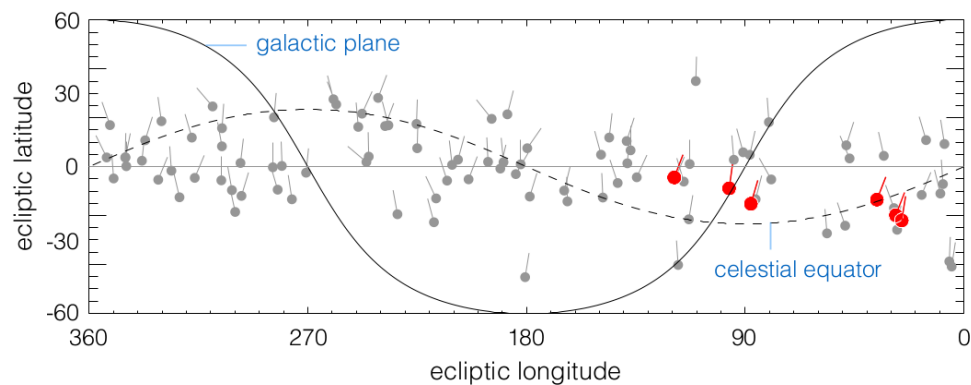
- 2つの惑星の軌道周期の比が整数の時に起こる。多くの場合惑星をトラップする効果
- 海王星と冥王星の 2:3 共鳴: 軌道は交差しているがぶつからないように回る

- 永年摂動

- 共鳴関係になくとも起こる効果。惑星を、軌道の形のリングに置き換えて、それからの重力の効果、ともいえる。
- 惑星軌道は近点が止まっていたりゆっくり動く楕円なので、一般のポテンシャルとは違って複雑な永年摂動が働く。

永年摂動

「第9惑星」という話も理論はこれに基づいている



衝突の効果

- 惑星リングでは典型的には1つの粒子は軌道周期程度の時間で他の粒子と衝突
- 原始惑星系では、重力相互作用と衝突・合体の双方が重要になる。またガス円盤も重要
- 銀河円盤：恒星同士は衝突しない。重力による散乱の効果のみ。

この講義では、理論としては安定性を扱う。衝突が十分に効くなら流体と考えられるし、そうでなければ恒星系(6次元位相空間での分布関数)としては扱う。

非軸対称モードの安定性は理論的・解析的にはほとんど手がでないので、軸対称モード(リングに分裂するモード)を扱う

軸対称モードの安定性

式の誘導は結構大変なので、まず流体の場合に結果だけ書く。
 k を半径方向の波数、 ω を時間方向の角振動数、 v_s を音速、 Σ を面密度、 κ をエピサイクル角振動数として、分散関係が

$$\omega^2 = \kappa^2 - 2\pi G\Sigma|k| + v_s^2 k^2 \quad (1)$$

で与えられることがわかっている。

エピサイクル角振動数:与えられた円盤ポテンシャル上での粒子の運動の、半径方向の振動の角振動数

エピサイクル振動数の計算

今、ポテンシャルが中心からの距離 R の関数として $\Phi(R)$ で与えると、有効ポテンシャルは

$$\Phi_{eff} = \Phi + \frac{L_z^2}{2R^2} \quad (2)$$

である。 R 方向の運動方程式は

$$\frac{d^2 R}{dt^2} = -\frac{d\Phi_{eff}}{dR} \quad (3)$$

で、これを円軌道の周りに展開して、 $R = R_0 + x$ とすると

$$\frac{d^2 x}{dt^2} = -\kappa^2 x \quad (4)$$

$$\kappa^2 = \frac{d^2 \Phi}{dR^2} + \frac{3}{R_0} \frac{d\Phi}{dR} \quad (5)$$

もうちょっと変形

κ を円軌道自体の角振動数 Ω で書き直す

$$\Omega^2 = \frac{1}{R} \frac{d\Phi}{dR} \quad (6)$$

なので、

$$\kappa^2 = R_0 \frac{d\Omega^2}{dR} + 4\Omega^2 \quad (7)$$

となる。 κ はケプラー軌道の時に Ω に等しく、調和ポテンシャルの時に 2Ω に等しいので、普通の銀河円盤等のポテンシャルでは

$$\Omega < \kappa < 2\Omega \quad (8)$$

となる。

分散関係の意味

式(1)の意味を考える。まず、ジーンズ不安定の式と並べてみる。ジーンズ不安定の分散関係は

$$\omega^2 = v_s^2 k^2 - 4\pi G \rho_0 \quad (9)$$

だった。これと、円盤の軸対称モードの式を比べると、

$$\omega^2 = \kappa^2 - 2\pi G \Sigma |k| + v_s^2 k^2 \quad (10)$$

ジーンズ方程式との比較

- 音速に関する項 $v_s^2 k^2$ は普通の波動方程式になる項で、どちらでも同じ形
- 重力の項は、ジーンズ不安定では $-4\pi G\rho_0$ だったのが、円盤では $-2\pi G\Sigma|k|$ ところにも波数がいってくる。
 - ジーンズ不安定では重力は3次元的に無限一様に広がったもの同士=ポテンシャルは距離に比例
 - 円盤では重力は2次元的なので対数ポテンシャルになり、距離が近いほうが強い、
- κ^2 の項は、元々の重力ポテンシャル上のエピサイクル運動の効果

温度0の極限

$v_s = 0$ の極限、つまり、温度 0 の極限では

$$k_{crit} = \frac{\kappa^2}{2\pi G\Sigma}; \quad \lambda_{crit} = \frac{2\pi}{k_{crit}} = \frac{4\pi^2 G\Sigma}{\kappa^2} \quad (11)$$

という臨界波数と臨界波長があって、これより高い波数(短い波長)は不安定

ジーンズ不安定との違い:

- エピサイクル運動が重力を抑える効果になる
- 重力が2次元的で距離が近いと強くなるために、波長が短いと不安定で、成長速度も波長が短いほど大きい

有限温度の場合

あらゆる波数 k に対して振動数 ω が実数であるためには

$$\kappa^2 - 2\pi G\Sigma|k| + v_s^2 k^2 \geq 0 \quad (12)$$

であればよく、このためには

$$\frac{v_s \kappa}{\pi G\Sigma} > 1 \quad (13)$$

であればよい。

$$Q = \frac{v_s \kappa}{\pi G\Sigma} \quad (14)$$

のことを Toomre の Q 値と呼ぶ。

恒星円盤の場合

(流体との違いは、星同士が衝突するかどうか)

同じような分散関係から安定性限界を導くことができる

$$Q = \frac{\sigma_R \kappa}{3.36 G \Sigma} > 1 \quad (15)$$

ここで σ_R は半径方向の速度分散である。ジーンズ不安定の場合と違って、係数が流体の場合と微妙に違う (π と 3.36)。

「現実の」円盤

ここまでの解析の仮定:

- ディスクが無限に薄い
- 重力場や回転の影響はローカルなポテンシャルの微分だけで書ける

従って、「波長が半径 R に比べて十分小さく、なおかつディスクの厚さに比べて十分長い」場合しか正しくない。

ついでのみ適用できる。

ディスクが厚さをもっている場合

- 十分短い波長では重力が3次元的になって普通のジーンズ不安定の表式になる
- 問題は、 λ_{crit} とディスクの厚さの関係

$$\lambda_{crit} = \frac{4\pi^2 G \Sigma}{\kappa^2} \quad (16)$$

なので、系のトータルの質量。半径、重力定数を1程度に規格化した単位系を考えると λ_{crit} はほぼ Σ だけで決まる(κ も1前後になるため)。原始惑星系円盤や惑星リングのような、 Σ が非常に小さい場合には λ_{crit} も系のサイズに比べて非常に小さくなる。

現実のディスク

- 原始惑星系円盤や惑星リングは非常に冷たくなければ安定である。
- 惑星リングの場合には実際に非常に冷たく、このために非常に小さなスケールで多様な構造が現れることが最近ではカッシーニ等の観測で明らかになっている。
- 原始惑星系円盤の場合には、円盤ガスは安定というのが京都モデル。但し観測的にはリングやスパイラルがどんどん見つかってきている。
- 円盤銀河の場合には、面密度は1まではいかにしても0.1より大きい程度になり、このために λ_{crit} は結構大きい。このため、普通の恒星円盤では厚さは臨界波長より小さく、 Q 値がそれなりに安定性を表す

スパイラルモードの場合

- 現状の系外銀河や原始惑星系円盤では結構色々なスパイラル構造が見つまっている
- でも、解析的に計算できるのは「tight winding 近似」くらい
- なので、その話のあと、数値計算ベースの話を少しする

tight-winding 近似

tight winding の近似:要するに、ピッチアングル(スパイラルアームと円の回転方向のなす角度)が小さい=大体軸対称と同じようにあつかえる

m 本腕モードの分散関係は

$$(\omega - m\Omega)^2 = \kappa^2 - 2\pi G\Sigma|k| + v_s^2 k^2 \quad (17)$$

と書ける

tight-winding 近似

- 安定・不安定の条件は $m = 0$ のモードと全く同じ
- 不安定な時には実部に $m\Omega$ が入る
- 不安定モードはラグランジュ的に回転にくっついて成長する

これは、tight-winding 近似してさらに半径方向に対して波長が短いという近似もしたので、 Ω の半径依存性もどこかで落として解析したような話になっている。

グローバルなスパイラルモード



M101 銀河。スピッツァー衛星
での赤外線画像

実際の銀河では、全く
tight-winding も局所近似
も成り立たないような大き
なスケールでのスパイラル
構造が見つかっている。
中間赤外で見える低温のガ
スは複雑な構造をもつ
大きなスケールでのスパイ
ラルアームがあるように見
える。

多くの銀河についてそういう構造があるように見える。

グローバルなスパイラルモードの理論的 困難

- そのような構造を定常的に維持するメカニズムはなにか
- そもそもそのようなメカニズムはあるのか

は依然未解決の問題。

- 不安定モードは基本的にローカルな角速度で回転するため、半径方向に広がったモードはどうしても差動回転の効果で時間がたつと巻き込んでしまう (巻き込みの困難)
- ある形をもったスパイラルアームが時間的に成長したり、定常状態になったりしてくれない

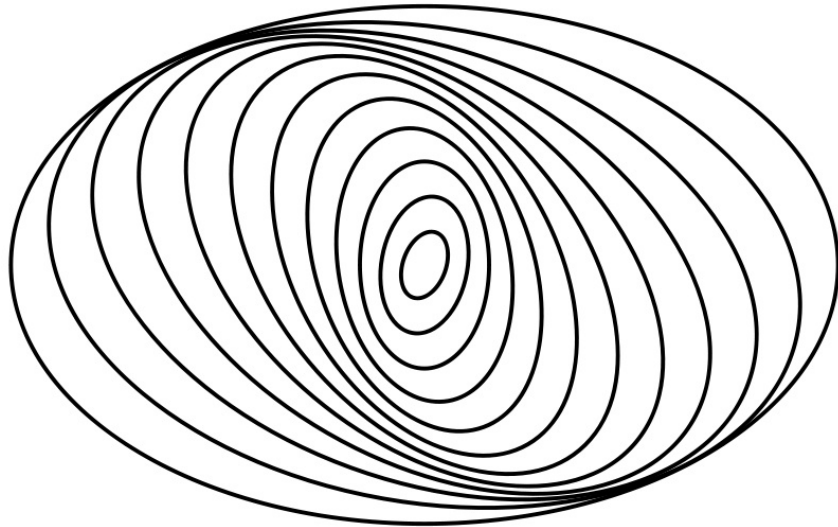
巻き込みの問題の回避(?)

これまで唱えられていた理論は例えば以下のようなものがある

1. 定常密度波理論 (いわゆる Lin-Shu 理論)。これは、大雑把にはスパイラルアームは実体ではなく、「密度波」だということのもの
2. 非定常理論。これは要するに、アームは次々にできたり消えたりするものである、ということのである。

定常密度波理論

これは、大雑把にはスパイラルアームは実体ではなく、



こんな感じにうまいこと軌道がずれていくことでできる見かけのパターンであるとするものである。エピサイクル周期も半径に依存するし、なぜ同じ半径では大体位相がそろうのかとか、うまいことスパイラルパターンができるようにその位相が半径によってずれるのかとかは良くわからない。

定常密度波理論

これで全くなにも説明できないというわけではない。アームはともかくポテンシャルが実際に非軸対称の時に、このようなパターンは確かにできる

- 棒渦巻銀河
- 相互作用銀河

但し、棒渦巻銀河の詳細なシミュレーションでは、アームはバーの先端からでていますが時間変化は結構する(定常ではない)ということもわかってきた。

非定常理論

- 要するに、アームは次々にできたり消えたりするものである、という考え
- 。1970年代から1980年代にかけて、ディスク構造の多体計算は盛んに行われた。
- れらの計算では、 Q 値が1より少し大きい、軸対称モードに対しては安定なはずのディスクから計算を始めると、かなり強いスパイラル構造が数回転で成長する。しかし、数十回転までいかないうちに Q 値が大きくなり、そのような構造は消える。

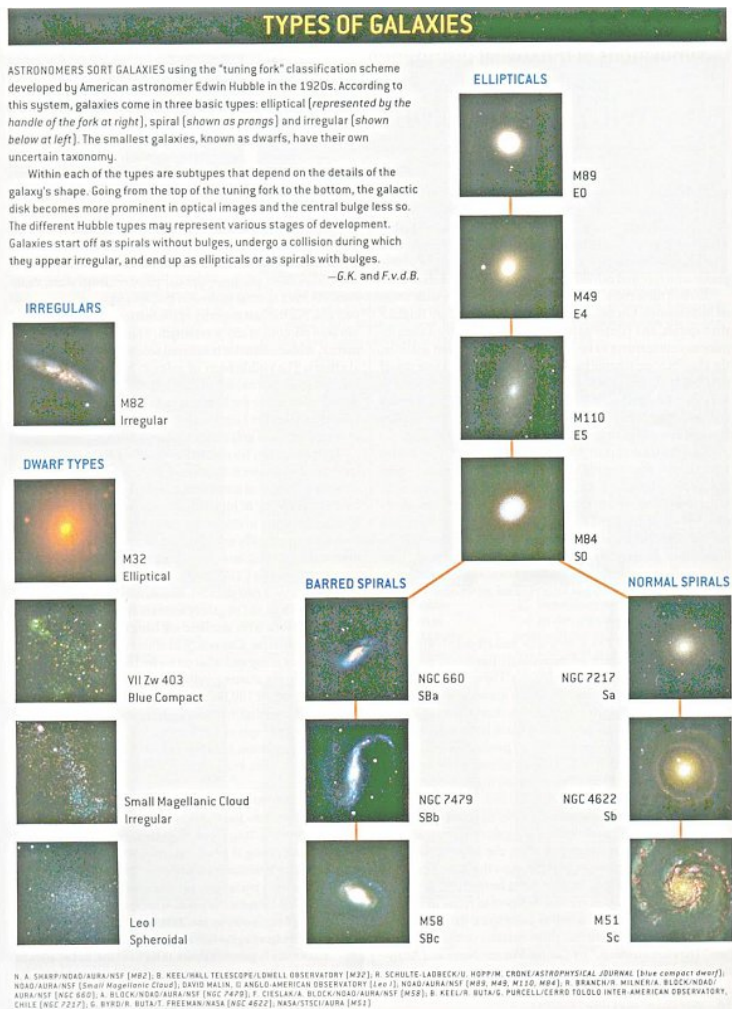
非定常理論

- 実際の銀河では、ガスが放射冷却で温度を下げることができるので、ガスがあるうちは Q 値がある程度小さくたもたれていると考えることができ、このために常に不安定性により新しいアームが作られている、と考える。
- 90年代以降この辺はあまり研究されていなかった
- 最近の大粒子数での数値計算 (Fujii et al, 2011) では、初期の Q の値や粒子数によっては、ガスによる冷却効果がなくても非常に長い時間にわたって非定常なスパイラル構造が見える、ということがわかってきた。

バーとバー不安定

- 上でみたように、スパイラル構造についてはそれを定常的に維持するメカニズムが何か、そもそもそんなものがあるのか、ということが良くわかっていない。
- しかし、グローバルな非軸対称モードとしてはスパイラルの他にバー不安定があり、これについては非線型領域で定常なバー構造が存在できることは古くからわかっている。
- Q 値的には安定なディスクであっても、ディスクだけでダークマターハローやバルジがないと必ずバー不安定を起こす、ということが1970年代から知られている。但し、グローバルモードであることから安定性条件等が単純な形で得られているわけではない。

銀河形成シミュレーション

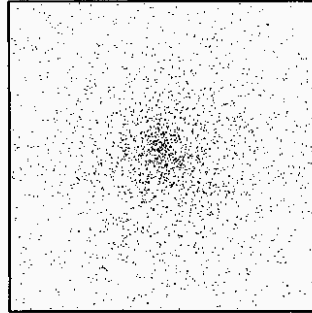
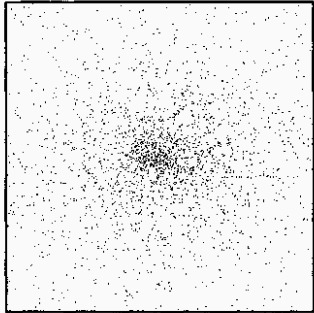


基本的な考え方:

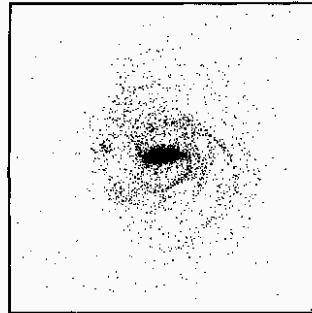
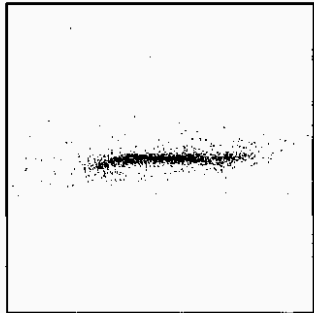
- 初期条件からの、銀河の「まると」シミュレーション
- 銀河の多様性の起源を理解したい

Katz and Gunn 1992

dark particles

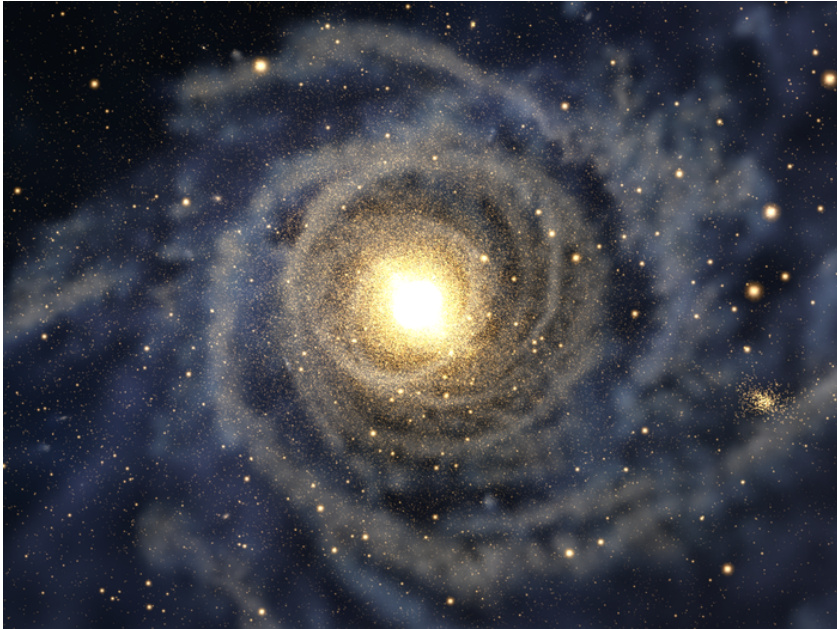


gas particles



- ダークマター+ガス+星
- 1万粒子くらい、Cray YMPで1000時間くらいの計算
- 1粒子の質量: 1000万太陽質量くらい

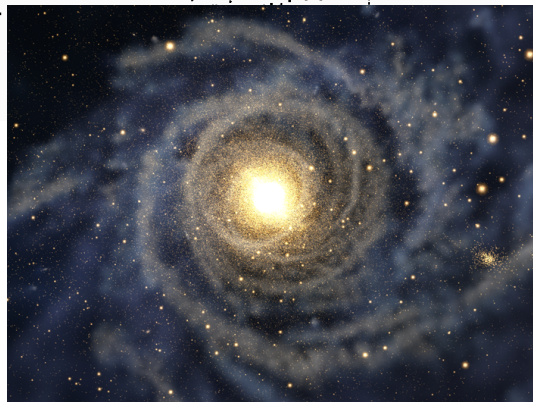
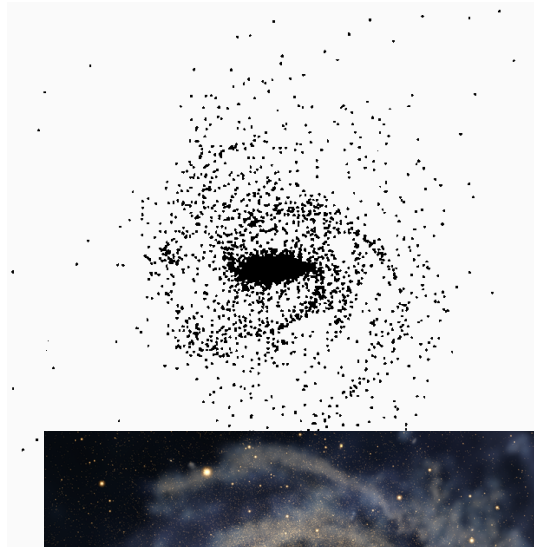
Saitoh et al. 2005



animation

- ダークマター+ガス+星
- 200万粒子、GRAPE-5
で1年(!) くらいの計算
- 1粒子の質量: 1万 太陽
質量くらい

分解能を上げるといいことがあるか？



- そうでもない？
- 大事なこと:物理過程のより適切な扱い
 - 星形成
 - 超新星爆発からのエネルギーインプット

星形成過程のモデル

- 本当に星1つを作るシミュレーション:分解能が太陽質量より 4-5桁高い必要あり
- 現在できる限界: 粒子の質量が太陽の1000倍。8桁くらい足りない
- 星ができる過程のモデルが必要
 - ガスが十分に低温・高密度になったら、星に変わる、とする
 - いくつかフリーパラメータがある
 - できる銀河の構造がパラメータのとりかたによってしまう、、、
- 超新星の扱いにも同様な問題

どれくらいの分解能でどうすればいいか？

- 答があうようになったらわかる？
- ガス粒子が星形成領域や分子雲より大きいようでは多分駄目
- 理論的には、十分な分解能があれば単純にガスを星に変えるだけでよくなるはず。
- そこに近付いている？
- あと 1-2 桁？

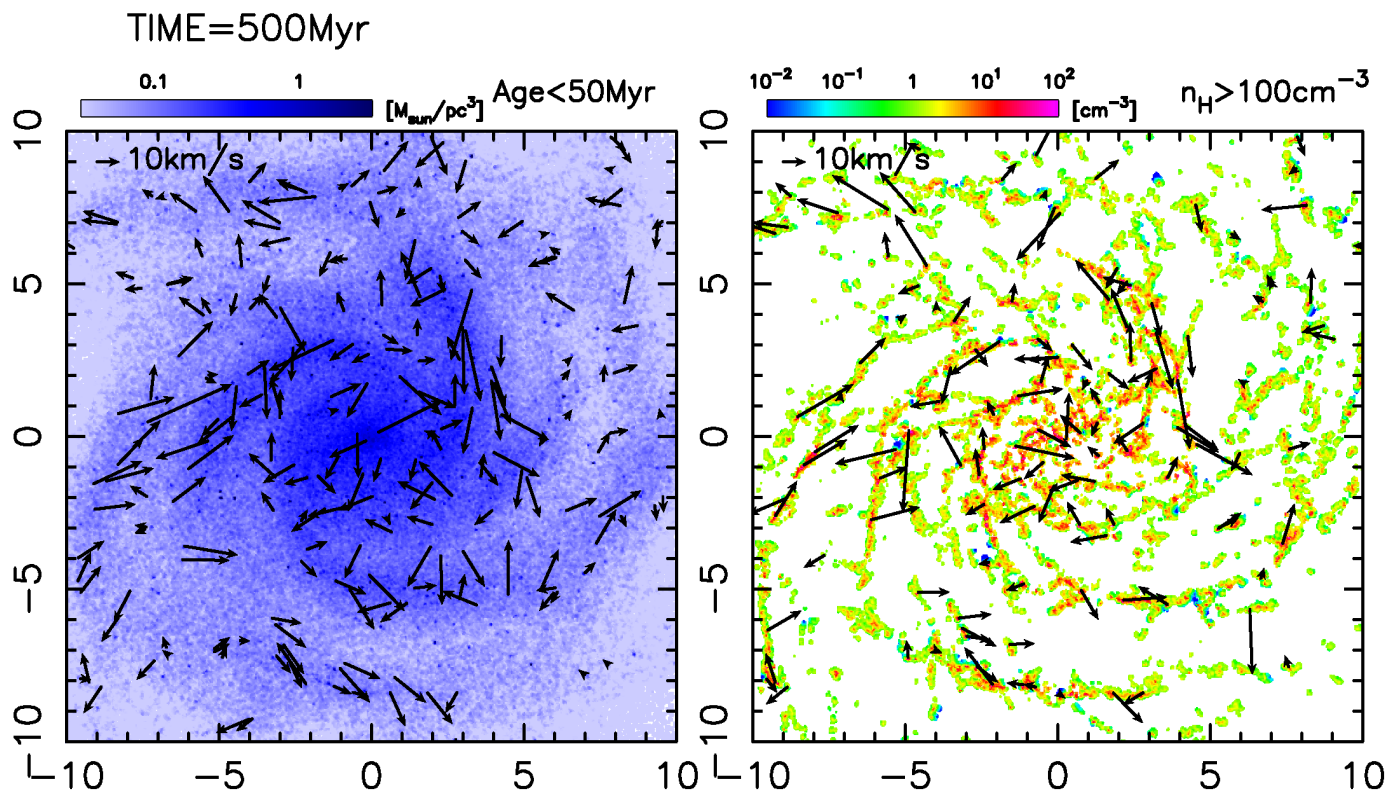
アニメーション

Star formation with SPH

Large scale structure formation with AMR

銀河円盤

渦巻構造と、円運動からのずれ animation (Baba et al 2009) 1 2



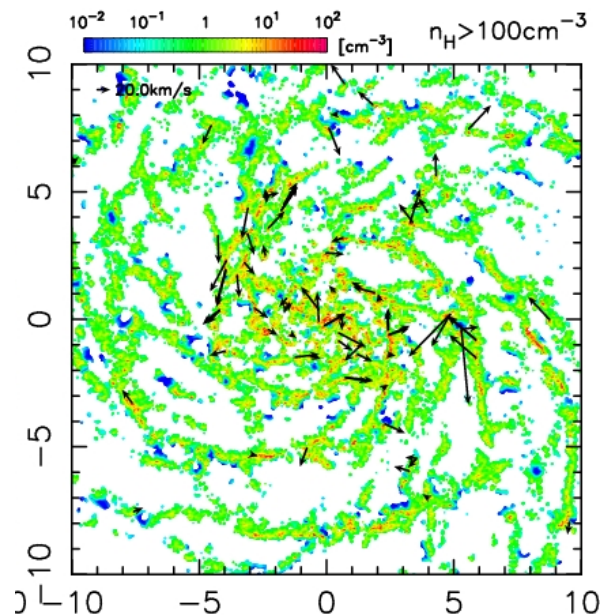
星の分布

冷たいガスの分布

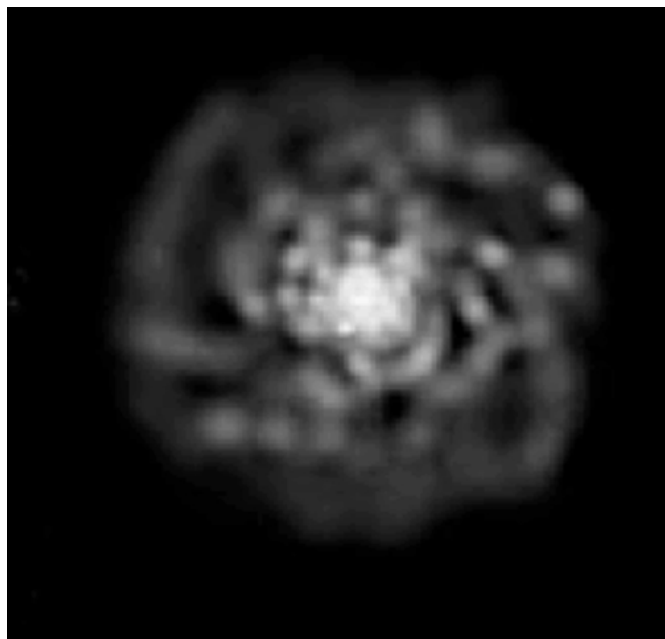
シミュレーションの詳細

- ガスが低温・高密度になるところまで解く
- 多数の SPH 粒子で高分解能シミュレーション
- 計算機には国立天文台の Cray XT4、斎藤貴之さん開発の ASURA コード
- 10pc ソフトニング (← 500pc)
- ガスは温度 10K まで解く (← 10^4K)
- 粒子質量 $3000M_{\odot}$ (← 10^5M_{\odot})

高分解能モデルと観測



低分解能モデルと観測

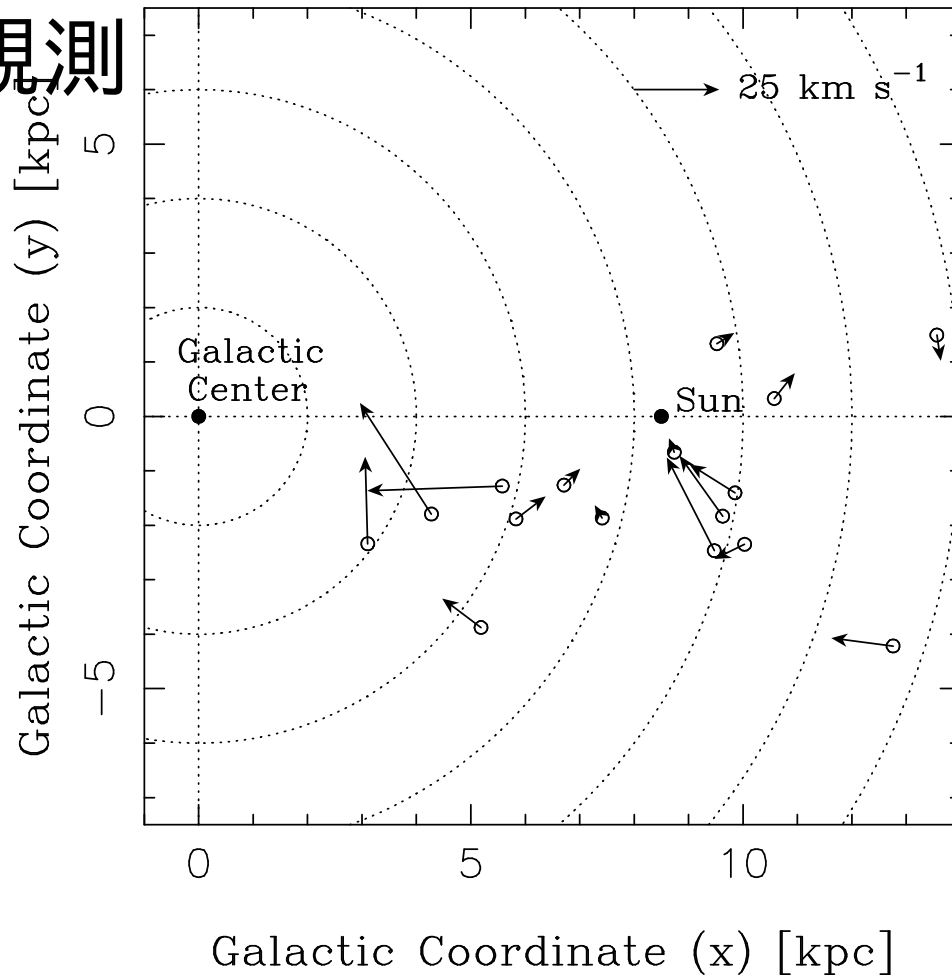


高分解能シミュレーションでわかってきたこと

- 星形成は大きなスケールの渦巻構造と関係
- 観測で見える複数アームがある渦巻は、定常ではなく形成・消滅を繰り返している
- この結果は、星形成のモデルの詳細にほとんど依然しない

電波干渉計による観測

- 2006: Xu et al, Science 311, 54
- Nov 2008: Burst of results from VLBA
- Several data from VERA

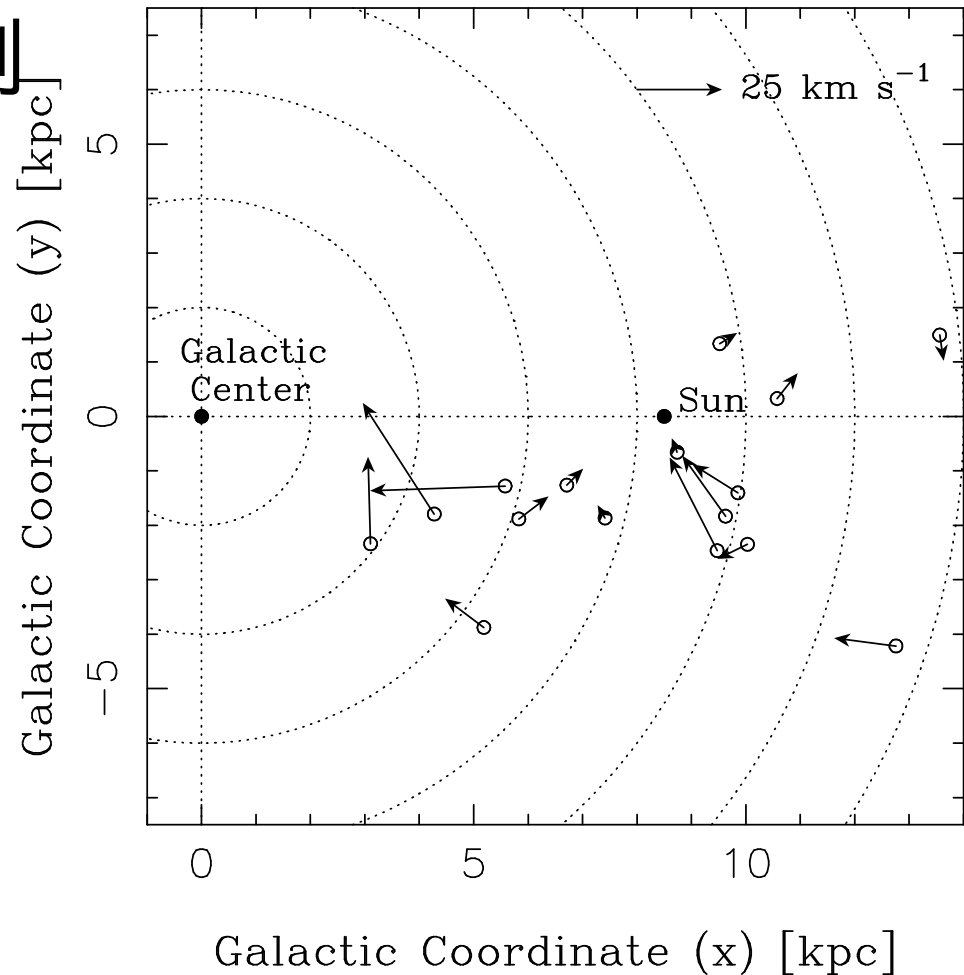


(Compiled by Dr. Asaki)

電波干渉計による観測

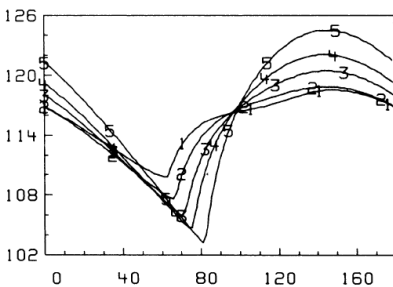
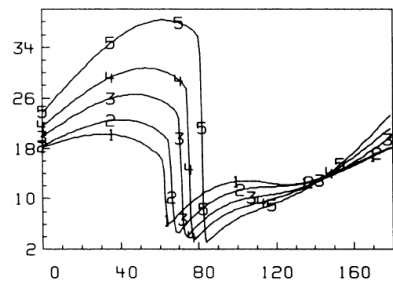
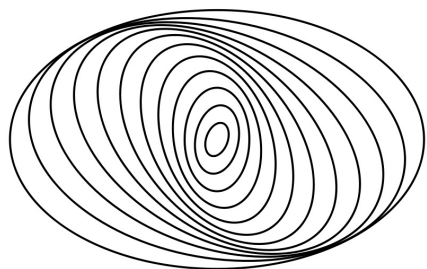
- 円運動からの大きなずれ ($\sim 30\text{km/s}$)
- 空間相関もあり？

このような大きな運動の起源は？



教科書に書いてあること

定常密度波



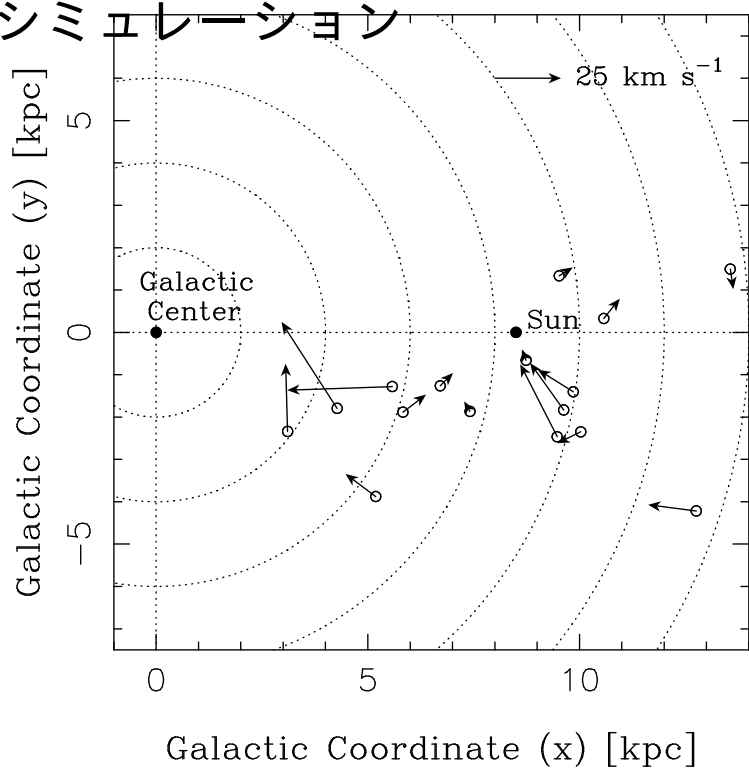
θ (deg)

- 渦巻構造は実体ではなく、密度波
- ガスは、渦巻が作るポテンシャルの底を通る時に圧縮されて、そこで星を作る
- 星やガスの円運動からのずれはごく小さい

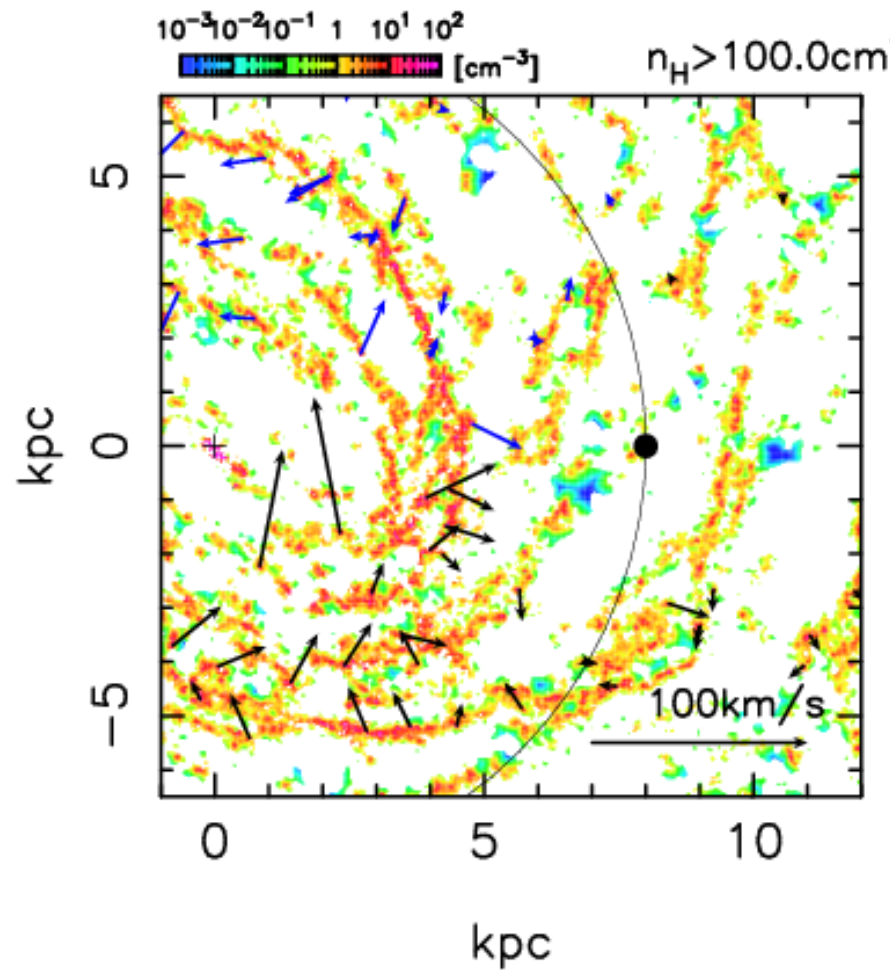
観測ともシミュレーション結果とも全然あつてない...

比較

観測とシミュレーション



TIME=1.25Gyr

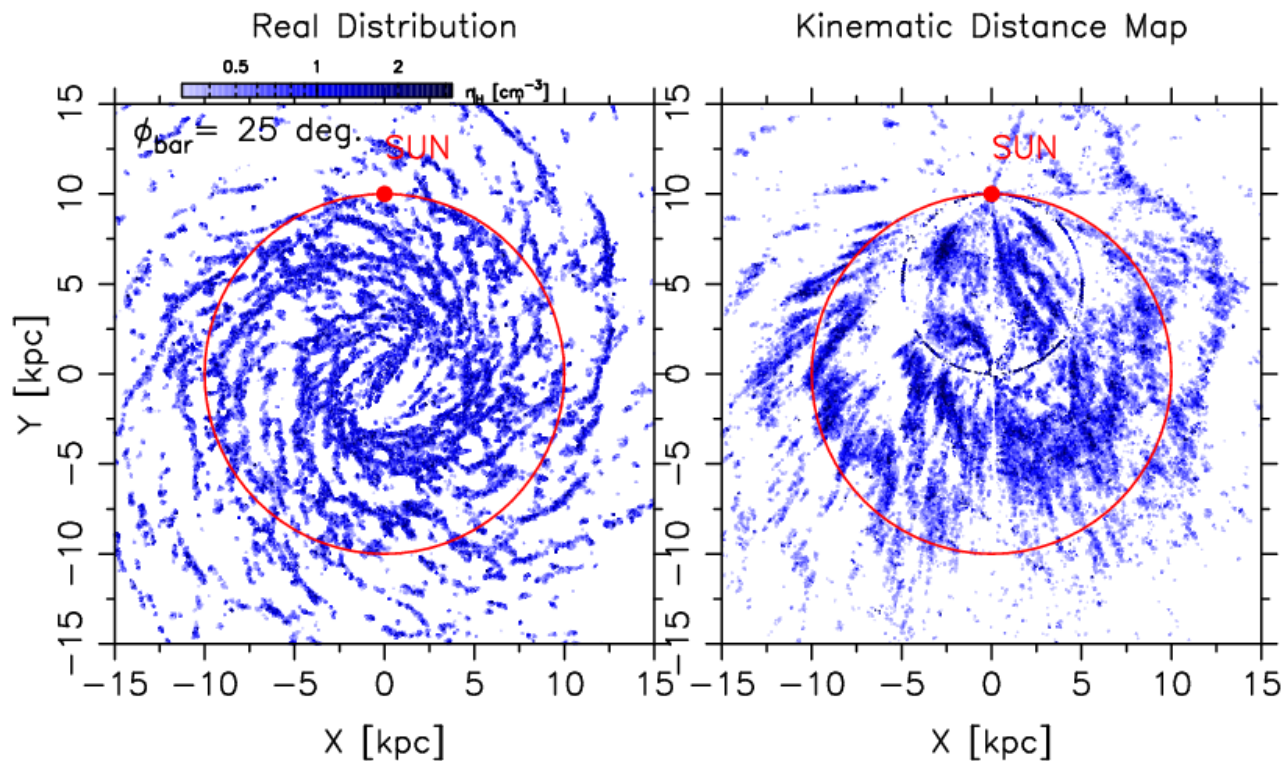


似ているような気が？

運動学的距離

TIME=2.00Gyr GAS ($T=10^{1.5}-10^{2.5}K$ $n_H=10^{-0.5}-10^{0.5}cm^{-3}$)

SUN : Pos=(0.0,10.0)[kpc] Vel=(169.5,0.0)[km/s]

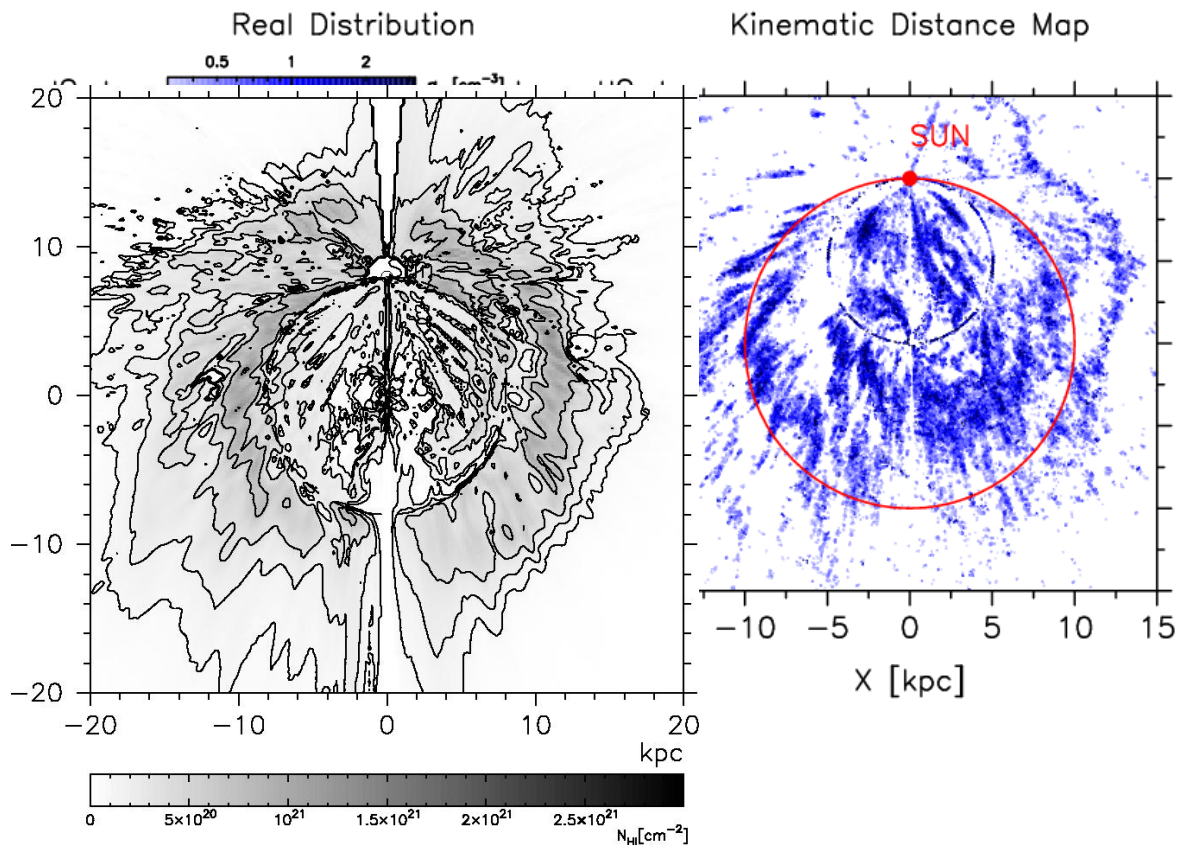


「円運動をしている」と仮定すると、速度の観測から距離が求まる
シミュレーション結果を観測すると、、、、

運動学的距離

TIME=2.00Gyr GAS ($T=10^{1.5}-10^{2.5}K$ $n_H=10^{-0.5}-10^{0.5}cm^{-3}$)

SUN : Pos=(0.0,10.0)[kpc] Vel=(169.5,0.0)[km/s]

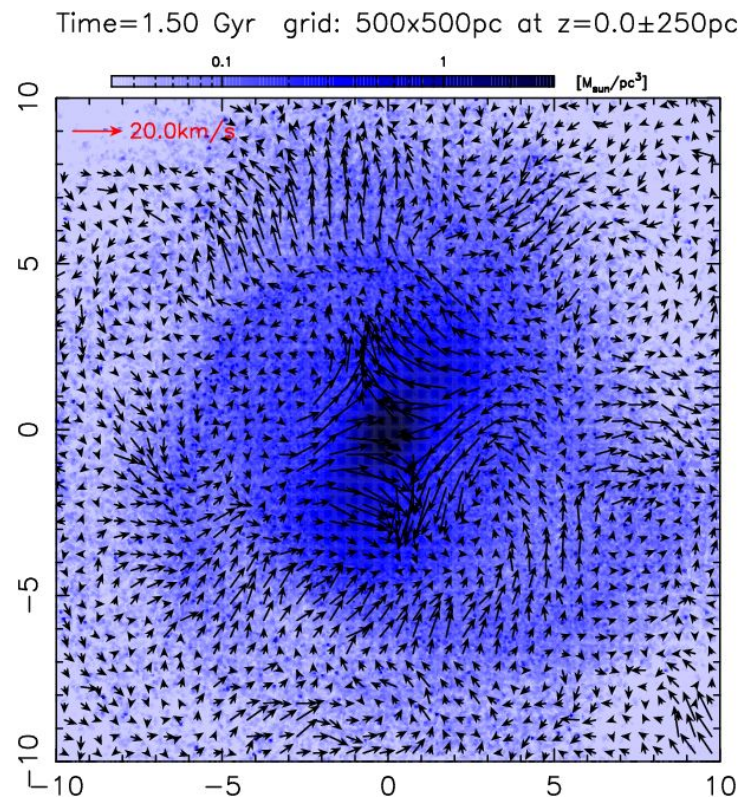


観測 (左) とシミュレーション (右) を比較すると、同じような構造

星のスパイラルの運動

星の運動の円運動からのずれ

- スパイラルアームは実体、密度波ではない
 - 古い星の平均の円運動からのずれも結構大きい
 - キロパーセクスケールの構造がある



ガス+星の銀河円盤シミュレーションのまとめ

- 高分解能計算ではスパイラルアームは自然にできる
- アームは定常ではなく、常に生成消滅している
- シミュレーション結果を「観測」すると、我々の銀河系の観測の色々な特徴を再現できる

星だけの円盤

(Fujii et al. 2010)

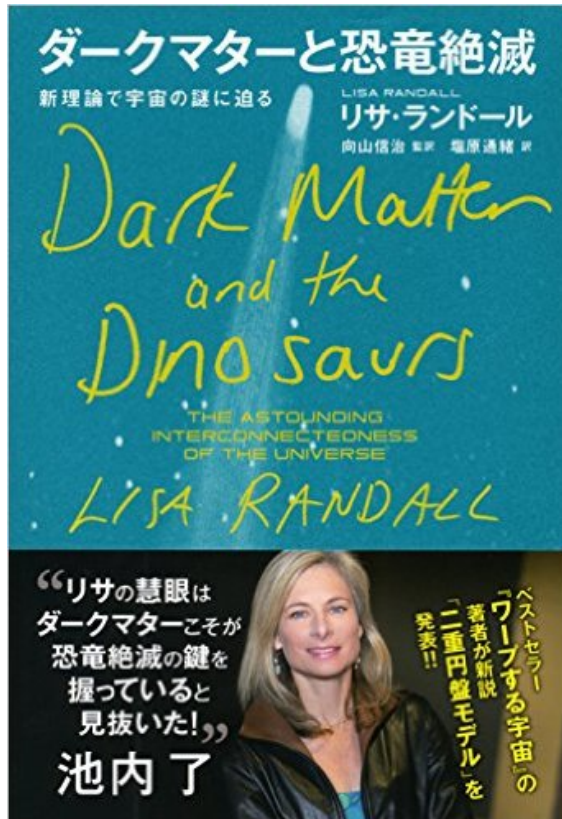
animation a1

animation a2

animation b1

- 軸対称モードに対しては安定 (a1, a2)
- スパイラルアームはできる
- 非常に長時間アームは消えない

余談：ダークマターと恐竜絶滅



- こんな本が去年でていた
- リサ・ランドールは大変有名で業績もある素粒子物理の理論家
- これは、「未知のダークマター」が薄い銀河円盤を作っていると恐竜絶滅が説明できるという説
- 講義で議論したような円盤の安定性の検討がない(著者達の論文読んでも)。

- 検討すると強い不安定。多分間違っている。

星形成と惑星形成

- 星形成
- 惑星形成

星形成についてわかっていること

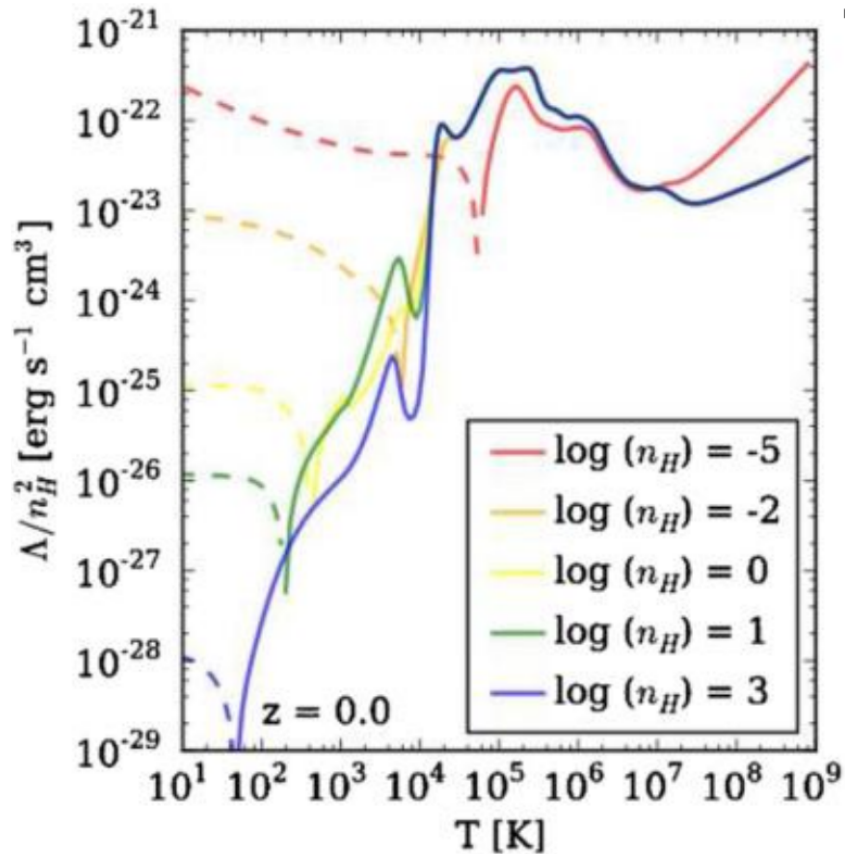
- 「星形成についてわかっていること」の整理はなかなか難しい。
- なので、まず、なぜ難しいか、を整理して、それからもう一度わかっていることを整理したい。

銀河形成の理論の側からみた星形成

- 銀河形成シミュレーションで、星ができたり超新星爆発したりもっともらしい振舞いをしていた
- 但し、星1つ1つのレベルまで計算しているわけではない。ガスやダークマターを表す粒子の質量が、最近の「高分解能」の計算でも太陽質量の1万倍くらいある
- なので、「星間ガスが冷えて、自己重力で集まってくると適当に星になる」と考える。

いろいろいい加減だが、「定性的には」正しい

ガスの冷え方



Kim et al. 2014(AGORA)

(破線は加熱。紫外線バックグラウンドによる)

密度が低い (0.01個/cc とか以下) ガスは 10^4 K から冷えない

密度が高くなると平衡温度は下がる。但し、冷却率は 10^4 K 以下では小さい

冷却率を決めているもの

- 10^4K 以上: 水素ガスは電離してプラズマになっている。:電子と光子の相互作用:Bremsstrahlung (制動輻射)
- 10^4K 以下: 水素はまず水素原子 (HI) になる。そうすると非常に冷却しにくくなる。水素ガスだけではほとんど冷えないが、(天文学でいう)「メタル」があると、ダストが形成され、ダストは固体なので熱輻射をだして冷える。水素原子とは衝突によって熱平衡にいくので、密度が高いと冷却率は大きくなる

「天文学でいう」メタルとは

- 水素とヘリウム以外の全ての元素のこと。炭素とか酸素も「メタル」なことが多い。天文学の論文で metallicity という言葉がでてくると大抵こっち。
- 地球科学とは結構違うのでこのへん注意が必要

銀河形成の観点からのガスの振舞い

理想化した話:

- ダークマター+バリオンの自己重力系が重力収縮していくと、ダークマターは冷えない(輻射をださない)ので最初の密度ゆらぎで決まる大きさに落ち着く
- バリオンは輻射をだして冷えて中心に集まる。角運動量で支えられた薄い円盤になる
- 薄い円盤はさらにスパイラルモードや、スパイラルアームの中での重力不安定を起こし、冷却しながら小さなものに分裂していく
- 星ができると、超新星爆発や若い星からの紫外線でガスは加熱されたり圧縮されたりする。

銀河形成の観点からのガスの振舞い

現実の話:

- 円盤形成・重力不安定による進化は確かに起こる
- その途中で、形成中の銀河同士が合体したり、小さな衛星銀河が落下してきたりする。
- ガス円盤同士も衝突して、衝撃波圧縮の結果爆発的星形成を起こす
- また、一部の(多くの?)ガスは角運動量を失って銀河中心に落ちる(バルジの起源?別の理論もある)

というわけで、ガスはかなりダイナミックに圧縮されたり加熱されたりする。

一方、星間ガスの理論の観点からの ガスの振舞い

- 初期状態として「無限一様で背景の輻射場と平衡なガスを考える」
- 熱不安定 (温度が低いガスは平衡温度が低いのでさらに温度が下がる) によって、高温ガスの中に低温ガスの塊ができる
- 但し、これは星形成につながるかということそうならない。より高密度のガスを衝撃波圧縮等で作る必要がある

星形成のシミュレーションの観点

1つの星の形成シミュレーション

星形成シミュレーション

連星形成シミュレーション

- 初期に適当な密度をもつガス球を置く。通例としては、ある温度で自己重力平衡な解を密度あげて収縮するようにする。一様な磁場とか回転もあったりする
- そこからシミュレーション

色々なことが起こってその過程は沢山の人が詳細に研究している一方、「その初期条件に意味はあるのか」はなかなか難しい。

星形成のシミュレーションの観点

星団形成のシミュレーション

Star formation with SPH

- もっともらしく沢山星はできる。
- 初期条件は？
- 星ができるところを本当に計算できてるのか？

シミュレーションの問題点

- 星になる前のガスとできた星の両方を流体シミュレーションで一気扱うのは現在のところ不可能
- 星ができるタイムスケール: 周りのガスが全部落ちてくるまで。典型的には100万年くらいと考えられている。
- 星を流体として解く: タイムステップ1分くらいが必要 (内部は上手くやって解かないとしても)。
- 1タイムステップ1ミリ秒でできても10年かかる。論文書けない、、、 というのはさておき、計算精度も問題になる。

ではどうしているか

- 普通やっていること：適当な半径 (1-5AU とか) から内側にはいったガスは「星」に落ちたとみなす (sink particle)
- これにはもちろん問題がある。本当は星の表面近くまで降着円盤が形成されるだろうし、円盤ガスの一部は磁場や輻射圧で赤道面から飛ばされたりするはず。そういう色々な効果を見捨てて単に中心星にくっつけると、成長速度やそもそも成長するかどうかも計算できなくなっているかもしれない
- とはいえ、現状他に方法がない

星形成について整理

- 星は、重力不安定な高密度・低温なガスが重力収縮してできる、というのは間違いない
- が、「重力不安定な高密度・低温なガス」がどこからどうやって供給されるかは理論的には明確にわかっているわけではない。観測すれば見えるのでそういうものはある。
- シミュレーションも、計算機の速度という以上に原理的困難がまだある。

理論的には

もうちょっとわかっていると考えていること (あまり初期条件に依存しないこと) もある。

- ファーストコアの形成
- 林フェーズ

このへんの話をしておく。

ファーストコア

「なんらかの理由によって」重力収縮に対して不安定な、ほぼ一様密度のガスがあるとしよう。

で、ほぼ球対称な領域が収縮をはじめたとする。

- 収縮して密度があがると、輻射で冷えるタイムスケールが短くなる (輻射にも原子力同士の衝突が必要なため)
- そうすると、ほぼ等温のまま、高密度で小さなコアができていく (メカニズムは厳密には違うが、重力熱力学的崩壊に似た自己相似解が現れる)
- コア密度が高くなり過ぎると輻射に対して不透明になって、収縮が止まる

これがファーストコア

ファーストコアのあと

- 外側のガスがコアにふりつもる
- ふりつもりって、力学平衡にある質量が増えるにつれて急速に明るくなる。
- 周りにまだガスがあれば赤外線で見える。ガスがなくなったら可視光で見えるようになる
- まだ中心温度は核融合が起こるほど高くないので、星はこのあと収縮に重力エネルギーの放出で光る＝原始星

原始星と林フェーズ

原始星の特徴

- 全体で対流が起こっている (輻射に対して不透明)
- この時、表面温度はほぼ一定 (説明省略、、、)
- このために、収縮していくに従って暗くなる。逆にいうと、最初の半径が大きい時には非常に明るくなっている

この段階を林フェーズ (京大にいた宇宙物理学者林忠四郎が発見したので) という

とはいえ

観測的には、原始星でおこっていることはもっと複雑

- 「原始星」といえるようになる頃には円盤ができていてそこから降着している
- この時、円盤の上下方向にジェット (双極分子流) がでることが観測的にわかっている。磁場によるもの (磁気遠心力風) が主要なメカニズムと考えられている。

といった話と、星形成領域、原始惑星系円盤を統合的に理解することはまだできていない (これは牧野の私見。できているという人もいるかも)

銀河形成と比べてみる

- 銀河形成の理論・シミュレーションは、現在は初期条件は決まったといっている。
- これは、既にのべたように宇宙論的パラメータと呼ばれる、バリオンの量、ダークマターの量、ダークエネルギーの量、膨張速度、密度ゆらぎのパワースペクトルといったものがマイクロ波背景輻射や超新星の観測から正確に決まったため。
- 密度ゆらぎのパワースペクトル(言い換えるとダークマターの性質)が決まる前は銀河形成理論も初期条件と形成過程について大論争があった。Monolithic collapse と hierarchical formation

銀河形成と比べてみる (2)

- コールドダークマターシナリオが一般的になると、
Monolithic collapse 説は段々フェードアウト (といっても最近の教科書でも生き残っていたりする)
- 銀河形成の教訓: 初期条件がわからないとなかなかサイエンスにならない、、、
- そういう意味で、星形成の理解はまだかなり初期段階といえる

初期条件が多少わかっている星

- 銀河形成の話で多少ごまかしたところ:星はいつで始めるのか
- 「初代星」の問題
- 15年くらい前から理論的(計算機シミュレーションを使ったものも)研究が盛んになってきた。
 - 初期条件が大体わかってきた
 - かなり早い時期に星はでき始めていないといけないという観測的要請: 宇宙の再電離

宇宙の再電離

- 「再」(何故「再」なのか今一つわからないが) 結合: ビッグバンから宇宙膨張が進んで、バリオンが主に陽子になったあと、さらに膨張が進み、温度が 10^4 度くらい(もうちょっと正確にいうと 3000K くらい)になると陽子と電子が結合、中性の水素原子に
- 光子とほとんど相互作用しなくなる。「宇宙の晴れあがり」。マイクロ波背景放射が見える理由。
- ちなみに:この時の「赤方偏移」 z は大体 1000 くらい。

ところが:

観測的には、 z が 10-20 のどこかで宇宙が再電離したとわかってきた。

宇宙の再電離

観測的な証拠

- 昔からわかっていたこと:ガン・ピータースン・テスト。
遠方のクェーサーからの光のライマン α 輝線を観測すると、「比較的波長の短いところだけ」吸収されている
- 中性水素が、 $z = 5.5$ くらいでなくなって、宇宙のガスはプラズマにもどったということ。
- もうちょっと精密な議論がマイクロ波背景放射の偏光観測から。(私はよくわかってないので追求しないで)
- これだと、 $z = 14$ くらいから始まって $z = 6 \sim 8$ あたりで終わる？

宇宙の再電離

なにが再電離を引き起こすか: UV(紫外線)光子が必要。水素原子のイオン化エネルギーを供給する必要がある。何度もでてくるが1万度くらいの熱輻射に相当

問題:何がUV光子を供給するか。候補

- クェーサー (活動銀河核含む)
- 初代星

クエーサーって？

- 「準星」最初に見つけた時はなんだかわかってなかった
- 水素の輝線から、「大きく赤方偏移している」＝「非常に遠くにある」とわかった
- 遠方の銀河の中心にある超巨大ブラックホールが明るく光っているもの

遠方の銀河とクエーサー

観測的にもっとも遠くの銀河とクエーサーは、、、

- 銀河: 赤方偏移 11.1、ビッグバンから4億年後

Hubble Team Breaks Cosmic Distance Record

”The combination of Hubble’s and Spitzer’s imaging reveals that GN-z11 is 25 times smaller than the Milky Way and has just one percent of our galaxy’s mass in stars. However, the newborn GN-z11 is growing fast, forming stars at a rate about 20 times greater than our galaxy does today. This makes such an extremely remote galaxy bright enough for astronomers to find and perform detailed observations with both Hubble and Spitzer.”

- クエーサー: $z = 7.1$, ビッグバンから8億年

とはいえ

- クェーサーは銀河より数桁少ないので、「見つかっていない」だけかも
- クェーサーはブラックホール(の降着円盤等)が光っているので、ビッグバンから数億年でどうやってそんな大きなブラックホール作れるの?という議論はある
- でも、銀河があるくらいだからどうにでもなるかもしれない

クェーサーと初代星

- 初代星は (次に述べるように) 銀河・クェーサーより (平均的には) 先にできる
- が、確率的な話なので非常に早くできる銀河もある。クェーサー (ブラックホール) もできるかも (色々シミュレーションや議論はある)
- 現在のところ、どちらか再電離に寄与したかはよくわかっていない (どちらもそれなりに的的な話になっている)

初代星の形成

- 現在のところ、一般的理解: 「初代星」はどうやってできたと考えられているか:
 - ダークマターハローは、非常に質量が小さいもの同士の合体で成長していく。(地球質量くらいから?これはダークマター粒子の正体、質量で変わる)
 - バリオンは太陽質量の10万倍程度のダークハローができて初めて重力収縮を始める(と考えられている)。それより小さいスケールのバリオンの密度ゆらぎは光子との相互作用でならされるため。
 - ダークマターハローの中心に、太陽質量の数十から数百倍の星ができる

初代星の形成—シミュレーション

- 15年くらい前から精力的にシミュレーション研究がされてきた
- 当初は、ハローの中心に一つ星ができるという「シミュレーション結果」だった
- 最近では2つに分裂するとかいや小さいのが沢山できるとか色々なシミュレーション結果があって混乱中
- 初期条件の(理論的な)違いではなくて、計算手法や「問題ない」としているはずの簡略化、計算精度等の影響(「いれ忘れていた初期条件」なんてのもある)

星形成の理解の現状

- 「星間ガスが冷えて、重力収縮して星になる」のは間違いない。
- 具体的にどんなふうにして重力不安定を起こすガスができるのかは銀河形成・進化とカップルした問題。まだ非常に良くわかっているわけではない。
- 初期条件についてはよくわかっていると考えられる初代星でも、まだシミュレーションやる人によってできる星が違う状態。

恒星進化

- 星の一生・内部構造
- 中性子星・ブラックホール・重力波

星の一生・内部構造

星形成は謎が多いができたあとはかなりよくわかっている。以下まず大雑把な話

- 中心の密度・温度が十分上がると、水素の核融合が始まって「主系列星」に
- 主系列星段階の寿命: 大質量星で数百万年。太陽くらいだと100億年
- 中心で水素燃焼が終わる(全部ヘリウムになる)と、ヘリウムの核融合が始まる。この時には赤色巨星になり、半径が不安定な振動を起こしたりする(変光星)
- 太陽質量の8倍以下の恒星は炭素・酸素から先には核融合が進まない。ヘリウムがなくなると白色矮星になる
- 太陽質量の8倍以上では、核融合がさらに進み、最終的に鉄までいくが、鉄コアの温度がさらに上がると一気にヘリウムに分解する吸熱反応が起きてコアが重力崩壊し、II型超新星になる。超新星のあとには中性子星ないしブラックホールが残る。

もうちょっと詳しい話

- 内部構造の基本方程式
- 主系列星の質量と光度の関係
- 主系列の後の進化

内部構造の基本方程式

球対称で定常な星の構造は、

- 質量保存の式
- 静水圧平衡の式
- 状態方程式
- エネルギー生産と輸送の式

で決まる。この辺をまずだしておく。(10/25に一部書いた)

質量保存の式

半径を r 、密度を ρ 、ある半径の内側の質量を M_r とすれば

$$\frac{dM_r}{dr} = 4\pi r^2 \rho \quad (18)$$

これは特に難しいところはない？半径 r から $r + dr$ の範囲の体積は半径 r の球の表面積 $4\pi r^2$ に厚さ dr を掛けたものなので、質量はそれにさらに単位体積あたりの質量である ρ を掛けたもの。

静水圧平衡の式

さらに圧力を p として

$$\frac{1}{\rho} \frac{dp}{dr} = -\frac{GM_r}{r^2} \quad (19)$$

さて、これはどういう式だったかということ、、、高踏的な説明は、「流体は圧力勾配から力を受ける。星の静水圧平衡ではそれが重力と釣り合う」というもの。

もうちょっと丁寧なつもりの説明: 半径 r から、 $r - dr$ に下がった時にどれだけ圧力が増えるかを考える。そこでの重力加速度が g なら、新しく上に載ることになる流体の質量は ρdr であり、重力の増加は $g\rho dr$ である。これが圧力の増加 dp と等しい。なので $dp/dr = -\rho g$ 。ここで $g = GM_r/r^2$ なので上の式になる。

状態方程式

これは、温度はそこそこ高くて電離した理想気体の方程式で、温度が高いと輻射圧 (光子の圧力) も無視できないので

$$p = \frac{\rho k T}{\mu m_H} + \frac{a T^4}{3} \quad (20)$$

ここで k はボルツマン定数、 a は輻射定数、 m_H は水素原子の質量、 μ は平均分子量である。

地球上なら理想気体といえは話は簡単だが、恒星内部で高温だと、原子の電離状態が組成、温度、密度の関数になるので少し複雑である。輻射圧は、あとで述べるような理由で大質量星では重要になる。

エネルギー生産の式

エネルギー生産：熱核反応。

- 主系列星の中心温度： 10^7K 程度。 $1\text{eV} \sim 10^3 kT$ なので 10keV 程度。
- 核融合反応で生じるエネルギーは 10MeV 程度。なので、 10^{10}K くらいまで温度が上がらないと普通には核融合は起きない(これは何故核融合炉は難しいかという話)

エネルギー生産の式(2)

- 「普通には」起きないが、量子力学的効果(トンネル効果)でほんのちょっとだけ起きる。
- おきやすさ: $\exp(-\sqrt{E_G/E})$ くらい。 E_G が量子力学的な効果を表す係数で単位はエネルギー、 E は2つの原子核の相対運動のエネルギー
- 原子核のエネルギーの分布はマックスウェル・ボルツマン分布なので $\exp(-\frac{E}{kT})$ になる

エネルギー生産の式 (3)

このため、典型的に反応が起こるところは、 $\exp(-\sqrt{E_G/E}) \exp(-\frac{E}{kT})$ が最大値をとるところで、これの対数をとって E で微分して 0 になるところを求めると、

$$\frac{1}{2} \sqrt{E_G} E^{-3/2} - \frac{1}{kT} = 0 \quad (21)$$

から

$$E = E_0 = \left(\frac{\sqrt{E_G} kT}{2} \right)^{2/3} \quad (22)$$

エネルギー生産の式(4)

で、この時の値は

$$\exp\left(-\frac{3E_0}{kT}\right) \quad (23)$$

になる。ここで、 E_G は kT よりはるかに大きいので、 E_0 も kT よりかなり大きくなる。

E_0 が kT よりずっと大きいということには、恒星の核融合反応には、エネルギーがマックスウェル・ボルツマン分布の典型的な値よりずっと大きな、非常に少数の原子核だけが関わっている、ということである。

このことから色々重要な帰結がでてくるが、まずその前に核融合反応の紹介。

核融合反応

恒星の中で起こる核融合の主要なものは水素原子核4個からヘリウム原子核ができる反応で、 $p-p$ チェインと CNO サイクルが主要な反応である。

- $p-p$ チェインは水素原子核 (陽子) だけがあればできる。陽子2個から重水素、重水素と陽子からヘリウム3ができ、ヘリウム3同士からヘリウム4と陽子2個になる。
- もうちょっと温度が高いとか、ヘリウム4の量が多いとかすると、ヘリウム3と4の融合でベリリウム7ができ、それが電子捕獲でリチウム7になり、さらにリチウムが水素と反応して2つのヘリウム4になる。あるいは、ベリリウム7が陽子捕獲してベリリウム8になり、これが分裂して2つのヘリウム4になる。

CNO サイクル

星があらかじめ C, N, O 等の元素をもっていると、それらが触媒として働く、要するに ^{12}C から 3 個陽子を捕獲して ^{15}N になり、これが陽子と反応して ^{12}C と ^4He に戻る反応が起こる。

これを CNO サイクルという。

水素燃焼の先

- 水素燃焼は数千万度 (1-2 千万度でも) 起こる。
- 水素がほぼなくなったあと、恒星の中心の温度が 1 億度程度まであがると、ヘリウム 4 の燃焼が起こる。これは、 ^{12}C と ^{16}O を作る。
- さらにもっと高温になると、炭素、酸素がそれぞれ核融合を始める。
- さらにもっと高温になると、最終的には ^{56}Fe まで進む。
- ^{56}Fe は「核子あたりのエネルギー」が最小の原子核で、そこから先はエネルギーが増える (吸熱反応になる) のでここで普通の核融合は終わり。
- 鉄から先は、超新星爆発や中性子星の合体の時にできる。

エネルギー輸送の式

恒星の中でエネルギーが運ばれる主要なメカニズムは輻射と対流である。まず輻射について。

表面近くを別にすると、星は「光学的に厚い」つまり、光学的厚さが1よりはるかに大きい。この時、光子は拡散的に振舞う。つまり、多数の原子核とぶつかってランダムウォークをしている。

エネルギー輸送の式 (2)

このため、輻射によるエネルギー輸送は熱伝導と同様、温度勾配に比例して

$$L_r = -4\pi r^2 \left(\frac{4acT^3}{3\kappa\rho} \right) \frac{dT}{dr} \quad (24)$$

となる。ここで、 L_r は半径方向のエネルギー流速、 a は輻射定数 (既にでてきた)、 c は光速、 κ は吸収係数である。

本当は光子のエネルギーには波長方向の分布があって吸収係数も波長依存性がある。ここでの κ は波長方向の平均 (ロスランド平均という特別なもの) をとったものである。

普通の熱伝導と同じ？

といったけどなんか式は変ではないか？単純な熱伝導なら、何か熱伝導の係数 C があって

$$L_r = -4\pi r^2 C \frac{dT}{dr} \quad (25)$$

となる。なので、輻射輸送の式は

$$C = \frac{4acT^3}{3\kappa\rho} \quad (26)$$

となっていることを意味する。なぜそうなるかを簡単に説明しておく。

輻射輸送の係数の意味

c は光速である。熱流が光速に比例するのは、動いている光子が熱を運ぶのでそういうことになる。

$4aT^3$ は、輻射の体積あたりのエネルギーが $4aT^4$ であることからくる。普通の熱伝導ではエネルギーは T に比例するだけなので、輻射のエネルギーは T^3 に比例して普通の熱エネルギーより大きい。

$\kappa\rho$ は光子の吸収されやすさなので、小さいと光子が遠くまで物質とぶつかることなく飛ぶ。このため、小さいと流れる熱は大きくなる。

(ここは本当はもうちょっと定量的に議論するべきだが、別のところで)

対流

- 普通の気体や液体では、下から上にエネルギーを運ぶ主要なメカニズムは対流である。
- 粘性が大きくない対流では、温度・密度構造は断熱的 (等エントロピー的) になる
- これは、対流に対して、断熱温度勾配は中立安定であるため。断熱温度勾配より小さい勾配であれば対流は起きない。
- 星のある程度温度が高いところでは、輻射によるエネルギー輸送が非常に効率的になるため、対流が起こらない。
- 極度に小さい星を除いては、星の (質量で) 大部分は輻射でエネルギーが輸送される。

対流 (2)

- 前回話をした林フェーズでは全体が対流的。これは温度が低いため。
- CNO サイクルになると、中心付近の一部が対流的になる
- 外側のちょっとは必ず対流的になるが、星の構造・高度には (林フェーズや巨星段階以外は) あまり影響がない。

星の内部構造・進化の方程式のまとめ

まとめると、エネルギー生産以外は、対流がおこっているところを無視すると

$$\frac{dM_r}{dr} = 4\pi r^2 \rho \quad (27)$$

$$\frac{1}{\rho} \frac{dp}{dr} = -\frac{GM_r}{r^2} \quad (28)$$

$$p = \frac{\rho k T}{\mu m_H} + \frac{a T^4}{3} \quad (29)$$

$$L_r = -4\pi r^2 \left(\frac{4acT^3}{3\kappa\rho} \right) \frac{dT}{dr} \quad (30)$$

星の内部構造・進化の方程式のまとめ(2)

状態方程式は、非常に大質量の星以外では輻射圧優勢にはならない。

エネルギー生産は、「温度に敏感にエネルギー生産が変わる」という性質のため、近似的には、星の中心温度は1-2千万度で、外側に流れるのに必要なだけのエネルギーが生産される、と考えてよい。